

My Town  
わが街

My Friend  
わが友

Mari  
マリ  
Christine  
クリスティーヌ



5

## 永福町

房さんや大江健三郎さん、谷川俊太郎さんが来てレクチャ―をしてくれることもありましたが、私の日本語の力ではすべてを理解できたとはとても言えません。今でもちよつと残念です。

人みんなにあいさつをしていました。駅まで歩いて約十分。その間に二十人以上の人に「おはようございます」や「こんにちは」を繰り返していました。「いつもいつも、

私の上智大学国際学部に入学したのは一九七二年。この学部の新学期は米国などと同じ九月から。母の姉にお世話になることになり、杉並区の永福町に住むことになりました。「お前は居候なのだから、小さくなっているのよ。ユー マスト ビー スモール」。私の頭の中でクエスチオンマークが飛び交いました。

母が言っていたのは、部屋がずっと狭くなるということなのね」と変に納得しました。日本語の意味を少しずつ覚えるようになり、「居候」という言葉の深い意味を知ったとき、遠慮して控えるに暮らすことなのだと言った分かります。

学生生活は楽しいものでしたが、問題がないわけではありません。四歳まではしゃり話すことができた日本語を、私はすっかり忘れていました。母は家庭内では英語で押し通していました。漢字が今でも苦手なのはそのせいですね。大学では作家の安部公房がある四ツ谷まで電車で通学するのですが、母かつ「駅までの道で会うご近所の人には必ずあいさつしてね」と言われました。最初はご近所の人なのか、そうではないのかが分かりませんので、出会う

あなたは何いね」と褒められたこともありました。今でも地方に行き、すれ違つ方にあいさつを交わすたび、あれが母の言っていた日本でのコミュニケーションなのだと感じます。

(異文化コミュニケーション  
題字も)  
全10話



あいさつが日課に 杉並区永福で

伯母の家は、小さな一戸建

# 「居候」控えめ学生時代